# 朝鮮碧巖大師（覺性）畫像寫眞

京都文科大學房藏

朝鮮の近世史に於て、一大異觀を呈せるは、宣祖より仁祖に至るの間、南は我が豐太閤より北は淸の太祖及び太宗より、交々壓迫を蒙りて、國勢日に蹙まれるの秋、多くの緇徒が、戒衣を着けて國難に赴き、王事に勤めし事なりとす。思ふに、近世朝鮮佛敎の兩大德たる淸虛浮休の幷びに臨濟の正風を宣揚して、多數の門下を提撕し、虐げられたる佛敎の頹勢を挽回するに力めしは、實に是時にあり。僧軍の事、亦其礌勒たる元氣の發露に外ならざるべし。只浮休の戰時德裕山の巖穴に隱れて出でざりしは、淸虛が松雲處英の徒と戰場に馳騁せるに似ざるも、其上足に碧巖ありて、氣骨稜々騰斗の如く、夙に松雲をして浮休の法嗣其人を得たるを賀せしめたり。彼れは仁祖の時、其徒を率ゐて南漢山城を築き、淸軍の入寇するや、三千の僧兵を募りて降魔軍を組織し、自ら僧大將となりて報効を圖れり。仁祖は彼れを以て八方都攝となし且つ大禪師號を賜ひ、衣鉢を授け、孝宗は彼れを待つに師禮を以てし、彼れの住せる智異山華嚴寺の格を陞せて禪宗の大伽藍となし、肅宗の時更に禪敎兩宗の大伽藍となせるもの、並びに異數の恩寵とす。彼れ晩年日本に使せんとせしも、中途に老病を發て辭し、松雲をして獨り檀瑞折衝の名を爲さしめたるは惜むべきなり。金丘夏曉溪華嚴の二大刹を訪うて、親しく碧巖が再修せる巨構を觀殊に華嚴寺に於ては、住持陳震應師より泉隱寺に傳ふる碧巖の眞影を示されたり。これを見るに、行狀の大德爲人短矮、氣象凝鬱、顏容粹美、三十九齒、目光外射、人皆顯若といへるに吻合し、眞に肯綮當の上乘なるものとす。乃ち其寫眞を卷首に收む。〔三浦〕